

今も消えない同和問題

中 三

私は、「本当の空」という映画を見るまで、人は誰でも平等であると思っていた。しかし、この映画によって、世界には様々な差別があることを知り、衝撃を受けた。その中で、私は、部落差別問題に着目した。部落差別問題とは、江戸時代頃から現代に至るまで根強く残る差別のことだ。昔は、えた身分、ひにん身分という身分があり、職業や婚姻の自由はなかったと言われている。現代では同和問題とも言われ、解決しなければならぬ人権問題である。

その中で私は、二〇一二年度に成人三千人に対して行われた、人権問題の意識調査の「同和地区や同和地区の人ということを意識することがありますか」という項目に注目した。回答の第一位が「気にしたり、意識したりすることはない」五十三パーセント、二位が「結婚するとき気にする」三十三パーセント、三位が「不動産を購入したり貸したりするとき気にする」九・一パーセン

ト、その他が二パーセントであった。この結果を見て、私は大きな衝撃を受けた。全回答のうち、約半数の人が、かつての同和地区に対して何らかの差別意識を抱いているのである。人々からこのような差別意識が消えない限り、本当に消滅したとは言えないだろう。

さらに、私が一番危険だと思うことは、インターネットが身近になった今、SNSやサイトなどにそのようなことを書き込まれたら、それがずっと残り、いじめに発展する可能性もあるということである。実際に調べてみると、気分の悪くなるようなことが書き込まれていたり、数々の実体験も書かれていたりした。なぜ百年以上経っている今でもこのような差別や偏見がなくならないのかと、苛立ちを覚えたのと同時に、とてもやり切れない気持ちになった。これは誰にとっても他人事ではなく、小学生や中学生、高校生が、一番真剣に考えなければならぬ問題だと思う。なぜなら、差別を一刻も早くなくすためには、私たちの世代が差別や偏見をもつことなく生活することが大切だからだ。そして、次世代に「みんな同じで平等なのだ。」ということ伝えていくことが、最も重要

なことだと思ふからだ。私たちの世代が、自分とは関係ないと、他人事のように考えていたら、この問題はいつまでも続き、完全に解決することはないだろう。私は、性別や住んでいる地域で差別されたことはないが、今まで様々な体験談を基に、すべてを自分に置き換えて考えてみた。

例えば、自分が結婚することになったとき、出身地が原因で相手や相手の家族に反対されたら。出身地が原因で友達が離れてしまったら。出身地が原因で何かを言われたり、嫌がらせをされたり、いじめを受けたりしたら。このようなことがあったら、私は耐えられないだろう。出身地を言うのが嫌になり、怖くなるだろう。いじめは、SNSの何気ない書き込みや、小さな一言ですぐエスカレートし、ヒートアップしてしまう。このようにして、差別は続いていくのだと感じた。これは本当に恐ろしいことであり、いじめてやろうという意識がなくても、人を簡単に深く傷つけてしまうということになる。つまり、悪気がなくても、いじめの加害者になってしまうということだ。私は、いじめは犯罪だと思ふ。人の心を傷つけるのは、決して許されない罪だと思ふ。

このような悪循環を生まないためにも、みんなにも是非一度、この問題を真剣に自分に置き換えて考えてみてほしい。忘れてはいけないのは、今も苦しんでいる人がいるということだ。差別は、一人一人がみんな平等だという意識をしつかりもっていないと決してなくならない。果たして自分は、みんな平等だという意識をもって生活できていたのだろうか。正直に言うと、私は、この問題に真剣に向き合うまでは、そこまで強くみんな平等だという意識をもてていなかった。この問題を通して、私は今も続けている差別を完全に解消させることは、決して簡単ではないということを知り、改めて人権の大切さを知った。

全ての人が自分のことのように差別について考え、伝えようという意識をもったとき、差別は完全に解消したといえるだろう。だが本来は、差別がないのは当たり前である。当たり前前を当たり前前にできる世の中は、今から私たちが創っていくべきだ。いつまでも、大人に頼っていてはいけない。